

ビデオ 通信

2016年
10月6日(木)
No.4021

60TH ANNIV.

SINCE 1956

月・木曜日発行
1ヶ月¥11,000(税別)
発行：飯澤剛 編集：齋藤浩一

ユニ通信社

〒106-0047
東京都港区南麻布 5-2-37
DEPECHE MODE 1F
TEL：03-5422-7515
FAX：03-5422-7516
E-mail：vt@uni-press.net

映学社

人権学習教育映画『こんにちは 金泰九さん』が海外映画祭で高い評価
「世界人権映画祭」(インドネシア)で金賞・ドキュメンタリー部門最優秀賞など
日本の社会問題を世界に正しく発信していきたい



表彰を受ける高木裕己氏

(株)映学社が2015年に制作した人権学習教育映画『こんにちは 金泰九さん～ハンセン病問題から学んだこと～』が、第5回「世界人権映画祭」(インドネシア)で金賞およびドキュメンタリー部門の最優秀賞を獲得した。9月19日(現地時間)にジャカルタで行われた表彰式に代表取締役社長の高木裕己氏が出席、表彰状を受けた。この作品は、第33回全国中学生人権作文コンテストの法務大臣賞を受賞した後藤泉稀さん(広島県福山市・盈進中学高等学校)の作文「NO! といえ

る強い心をもつ」を映画化したもので、同校ヒューマンライツ部による長島愛生園で暮らす金泰九さんとの交流を通し、ハンセン病の歴史や人権侵害を二度と繰り返さないよう強く訴えかけていく映像となっている。同作品はロサンゼルスのアウェアネス映画祭で優秀賞、ハリウッドインディペンデント国際映画祭で奨励賞を受賞しているほか、ポルトガル映画祭やロンドン短編映画祭でも最終選考に残っているという。高木氏は「今後も人権問題、防災、交通問題を三本柱に教育映像を自主制作していく。また、海外の映画祭などに積極的に出品していくことで、日本の社会問題を正しく世界に発信していきたい」と話している。



『こんにちは 金泰九さん』の英語版

ハンセン病問題から学んだこと

映学社が制作した『こんにちは 金泰九さん～ハンセン病問題から学んだこと～』は、ハンセン病問題をテーマとした人権学習教育映画。

ハンセン病に対する厳しい差別、悲しい歴史とその中を生き抜いた人々の歴史が風化しないよう伝えていきたい——広島県福山市にある盈進中学高等学校ヒューマンライツ部では、らい予防法が廃止された翌年の1997年から岡山県瀬戸内市の国立療養所 長島愛生園を訪問し、入所者の苦し



『こんにちは 金泰九さん～ハンセン病問題から学んだこと～』

制作統括・監督：高木裕己／撮影：照屋真治／録音：遠山浩司／ライン編集：正者章子／挿入歌：夏川りみ「涙そうそう」／コーディネーター：斎藤晃顕／ナレーター：斉藤ともこ／制作・著作：映学社

みや悲しみの人生から「生きる意味」や「生き抜いた証」を聞き取る体験学習を続けている。その活動の中で、同部の後藤泉稀さんが中学1年生の時に書いた「ハンセン病から学んだこと」についての作品が、第33回全国中学生人権作文コンテストで法務大臣賞を受賞した。

映学社 代表取締役社長で同作品の制作統括・脚本・監督をつとめた高木裕己氏は〈この作品の内容を映像化することで、かつてハンセン病を患った人達や家族への人権侵害の歴史を二度と繰り返さないよう強く訴えかけることができると考えました〉とする。

当初はドラマの企画だった

同社では、これまで数多くの人権問題、防犯・防災、交通問題など、社会性の高い教育映画・映像を自主企画・製作してきている。それは様々な制約を一切受けないからだ。

今回は、後藤さんが書いた作文の著作権を持つ法務省人権擁護局を介して、盈進学園 盈進中学高等学校に映像化について相談し、ヒューマンライツ部顧問の延和聡氏の協力を得たことで、ハンセン病療養所が持つ複雑な管理権などをクリアしたという。

〈例えば、写真1枚使うにも様々な許可が必要ですが、延先生の協力で、これまで出てこなかったような貴重な写真も提供いただけました〉(高木氏)

また、非常にセンシティブなテーマであり、入り込むことも難しいという危惧もあって、当初は柔らかなめのドラマ形式による映像化を企画していたが、延先生から「ドラマではダメ。キチンとドキュメンタリーとして撮って欲しい」との強い要望があったという。

〈取材していくうち、同部の卒業生で、金さんと会ったことで非常に励まされ、難しいと思われた就職を実現した聴覚障害の生徒がいたエピソードを聞き、これならドキュメンタリーとして広がる要素があると直感し、ドキュメンタリー作品として制作に取りかかりました〉

ハンセン病を越えた心の交流を描く映像が高い評価

インドネシア「世界人権映画祭」は、「平和と人権のための映画祭」をスローガンに、インドネシア環境庁と林野庁が支援する映画祭。インドネシアには1000以上の諸島があるが、森林伐採が大きな社会問題となっている。また、富裕層とそれ以外の人々の差が非常に大きく、人権問題も

根強く残っており、人権問題を訴える映画の普及を、国が支援していく目的で開催されているという。

今年で第 5 回を迎えた同映画祭において、『こんにちは 金泰九さん』は、825 作品の応募の中から金賞を受賞。その中でドキュメンタリー部門の最優秀賞を獲得した。

9 月 19 日にジャカルタで開催された授賞式では、ティモール国王やインドネシアの環境大臣／林業大臣も出席するなど、国として人権問題の映画を支援していく姿勢を示した。高木氏へのプレゼンターはインドネシア第 4 代大統領のアブドル・ラフマン・ワヒド氏の妹で映画祭の発起人でもある女性がつとめたという。授賞式の後には記者会見が開かれ、その模様は地元の新聞に掲載されたほか、テレビのブレーキングニュースでも報道された。

〈インドネシアにもハンセン病はありますが、日本だけがハンセン病を「らい予防法」によって絶対隔離し、一切外に出さなかった。絶対隔離法があったのは世界でも日本だけ。そうしたハンセン病問題に対して中学生が一生懸命取り組み、後世に残していく活動をする生き生きとした姿。それに応じて元ハンセン病の金さんも中学生達を笑顔で迎える。ハンセン病を越えた、心の交流を描く映像が新鮮だったと評価されました〉と高木氏。

なお、『こんにちは 金泰九さん』は 10 月 6～16 日に米国ロサンゼルスで開催される「アウェアネス映画祭」で優秀賞を受賞したほか、「ハリウッド国際インディペンデントドキュメンタリー賞」では奨励賞を受賞。さらに、現在、ポルトガル映画祭とロンドン国際短編映画祭でも最終選考に残っているという。

〈ちょうどこの作品を制作している 2 年前、ポーランドのアウシュビッツ強制収容所を取材した時、そこが中高生達の人権学習の場になっていることを知り、世界的に人権学習の必要性が叫ばれていることを感じました。世界にも類を見ない絶対隔離法「らい予防法」が 1997 年まで続いていたハンセン病問題は日本の「負の遺産」であり、人権の基本的な学習なんです〉

自主制作の教育映画で日本の問題を世界に発信していく

同社では、自社制作する教育映画・映像のうち、世界共通のテーマの作品については英語版も制作し、積極的に海外の映画祭などに出品しており、昨年は『最期の願い—どうする自宅での看取り』がワールドメディアフェスティバル（ドイツ）で銀賞を受賞している。（次ページへ）



授賞式と記者会見の様子



スピーチする高木裕己氏

高木氏は〈制約を受けない自主作品によって日本の問題を発信していく必要があると考えています。海外では日本の社会問題に関心が高い。『最期の願い』でも、日本が超高齢化社会をどのように乗り越えていくかについて注目されました。こうした発信は「教育映画」による正確な情報であることが大切だと感じています。様々な映画祭で審査員や他の出品者の話を聞いて、日本の社会問題を取り扱った正確な情報が不足していることを実感しました〉と語る。

なお、同社では現在、第34回全国中学生人権作文コンテストで法務大臣賞を受賞した、福岡県久留米市の中学生が書いた作品「戦争を次世代へ伝えて」の映像化が鋭意進められているという。

また、同社が中心となって設立した一般社団法人生涯学習支援機構では、高齢者の自主防災学習をはじめ、地域の人々に「社会教育、生涯学習とはどんなものであるか」を浸透させるサポートの活動を続けている。

高木氏は〈今後も「人権問題」「防災」「交通問題」を三本柱に映像制作を続けていく。高齢者ドライバーや認知症、介護離職等をテーマとした映像制作にも注力していきたい〉と話している。

◇映学社 <http://www.eigakusya.co.jp/>

〒160-0022 東京都新宿区新宿5-7-8 らんざん5ビル

TEL 03-3359-9729 FAX 03-3359-4024 MAIL info@eigakusya.co.jp



高木裕己氏 手前は世界人権映画祭の各賞状とハリウッド国際インディペンデントドキュメンタリー賞のトロフィー